

桜蔭俳話会 通信句会(第一一六回 平成二十七年冬)
高得点句 自句自解

七点

② 田一枚荒れ野へ返へし根雪かな

増田 守

旅の途次、ある過疎地域に立ち寄った。耕作放棄の田には葦が生い茂り、荒地地に戻っていた。先祖が大きな労力を費やして開墾した田畑は、社会的諸条件の変化による離村によって着実に消失しかかっている。雪の白さが目に沁みる。

六点

② 求職の絵馬ひるがへす寒の風

藤崎安紀子

就職難と言われたひと頃よりは、求人倍率も回復しているようですが、まだまだ景気回復の実感がもてない昨今です。神社へ詣でた時、たくさん絵馬の中から「今年こそ就職できますように」という祈願をみつけました。折りしも寒風が吹きつけ絵馬がカラカラと音をたてて舞っていたのが象徴的でした。

① 日々些事を重ねゆく初日記

藤本 友子

私は、昨年から「自分ほめ日記」なるものをつけています。かつては、反省すべきことばかりを書き記していましたが、自分をほめることで、少しばかり自分自身を元気づけよう。しかし、平凡な毎日の生活の中にはほめるに値するようなことは、それほどありません。毎日の些細な出来事を良いように解釈しては記しています。今年の初日記は、まささらな「五年日記」のペーシにささやかなほめ言葉が並びました。

① 故郷を出でし長さや四角餅

柏尾のり子

九州で生まれ育ったので、お餅は丸いものと思っていました。東京に出てきて主婦になっても、しばらくは実家から丸餅を送ってもらっていたものです。いつのまにか、自分の中で四角いお餅が定着していて、その月日の流れを感じて作った句です。

五点

② 千両や生きる証しの赤き色

坂本のり子

冬に赤い実をみのらせて力強く生きぬく様を見て、「私」もそのように生きねばと心動かされ

ました。孫も期待する齢となりました。皆々様も御健勝の事を期待致します。

海山のひととなり時雨来る

柏尾のり子

十一月末に、雲仙・天草に旅行した時の句です。有明海は遠浅でとても静かな海なので、海と空のやさしさが印象的です。ちょうど雨が降り始め、海と空が大きく一体にとけ合い、対岸の山も時雨れて背景にとけ込み、不思議な空間を走り抜けました。

ハモリつつ帰る少女ら春隣

藤本 友子

我が家の近くの小学校は、音楽教育に熱心で合唱の練習などに励んでいるようです。下校時の少女らは、笑い声と共に、美しいハーモニーなどを響かせつつ、帰っていくのを見かけます。その明るい様子は、春がもうそこまで来ているのを、感じさせてくれるのです。

四点

② 時を待つ数多のワイン山眠る

藤崎安紀子

甲府のワイナリーへ行った時の句です。甲斐の山懐に抱かれて静かに熟成の時を待つワインの数々。隣接のレストランで飲んだワインは本当においしかったです。

① 図書館の背中合せの冬の椅子

小川名梅乃

「小川名家、一代目の概要」と言うタイトルで原稿用紙五十ページにわたって書きました。最後のページで、私の生まれ育った二俣川駅のことを知りたくて旭図書館を訪れました。この一句は、男の人ばかり大勢の中、本棚の横椅子で本を読んでいた時の光景です。混雑していたため背中合せになりました。

① 筆ペンの穂先軽やか初日記

稲葉 幸

使っていました筆ペンの穂先がボンボンとなり、書きにくいので鳩居堂へ新しいものを行きましました。「穂先の替えが有りますよ」と聞き、驚きでした。思いがけず使い慣れた物の使えることとスラスラとすべる様に書けるこのうれしさでこの句が出来ました。

① 成人式出世するぞの顔並ぶ

稲葉 幸

「また、変な句を作ってしまった。恥ずかしい」と、事務局にお願いして、「ボツ」にするつもりでした。甥の友人五人。思わず出たのです、とともに私の正直な気持と期待をも込めています。

冬空や木霊秘めたる太き幹

桜井 幸枝

伊勢神宮の参道は程よく濡れてしっとり、空気は澄んでいた。ふと見上げた梢の隙間の蒼空は明らかだ。視線を下して来ると樹間はうす暗い。樹の精が満ちていた一本一木何百年か木の霊がひそむのを感じ、沢山の人並みは消え、そこだけの空間にいる思いだった。丁度、源氏物語の講読で「手習」の巻、浮舟、入水後の姿が思い浮かんだ。